

# 事業報告書

2021年10月

事業ID : 2020552774

事業名 : 被災地域在住高齢者に向けたオンラインでのデジタル活用支援(covid19 支える)

団体名 : 特定非営利活動法人心の架け橋いわて

## 目次

1.	事業概要 .....	1
2.	事業の目的 .....	2
3.	支援対象者について.....	3
	(1) 支援対象者のプロフィール.....	4
	(2) 支援内容・期間 .....	6
4.	成果と課題.....	9
	(1) アンケート・インタビュー結果.....	9
	(2) NPO 法人かだっぺしにおける事例 .....	11
	(3) 成果のまとめと課題.....	11
5.	今後の展望 .....	14
	(1) 事業の拡大.....	14
	(2) 動画を使った健康情報の提供.....	14

# 1. 事業概要

本事業は、i-MgNT（愛のマゴの手）プロジェクト（以下、本プロジェクト）として、新型コロナウイルス感染拡大による行動制限下での、被災地の高齢者を中心とした、パソコンやオンラインサービスの利用に不安を抱える方々の社会参加と孤独・不安、フレイル（心身の虚弱）予防を目的に大学生支援者が支援対象者の ICT サポートを行ったものである（図 1）。

2020 年 7 月に慶應義塾大学、岩手県立大学、岩手保健医療大学とともに当法人が事務局としてパイロット事業を開始し、その成果を受けて 2021 年 2 月よりプロジェクトの対象者を拡大し本事業を実施した（図 2）。

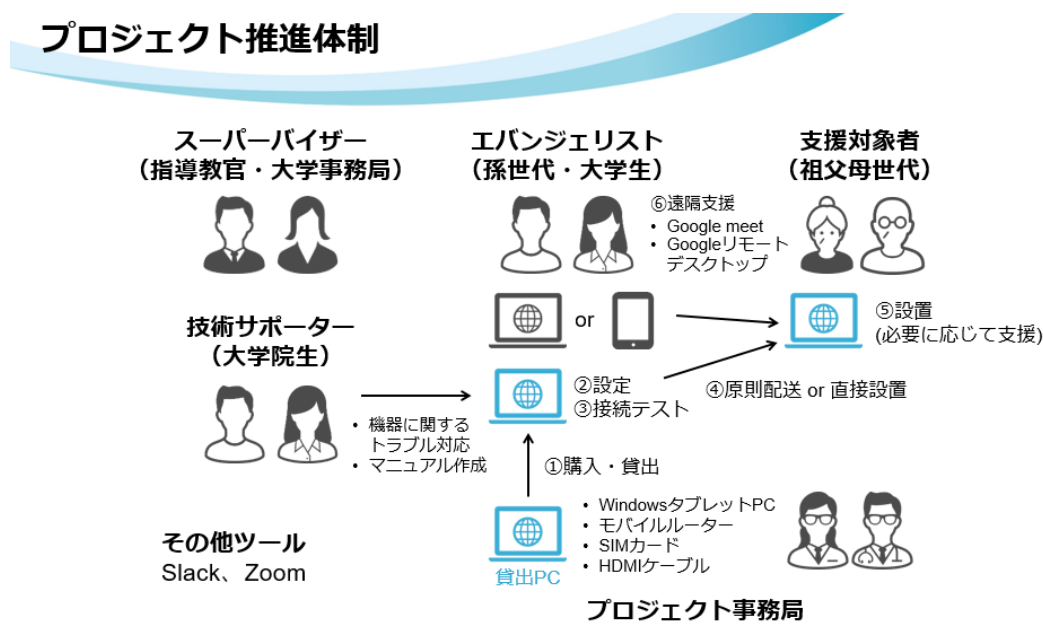


図 1 プロジェクト体制図（2020 年第 9 回東北みらい創りフォーラム発表資料より引用）

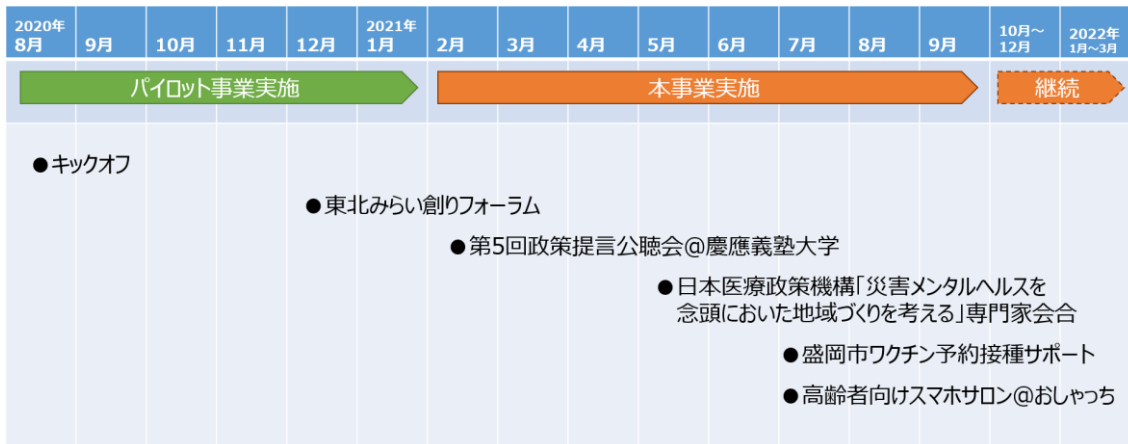


図 2 プロジェクトスケジュール

## 2. 事業の目的

上述の通り本事業の目的は、新型コロナウイルス感染拡大による行動制限下での、被災地の高齢者を中心とした、パソコンやオンラインサービスの利用に不安を抱える方々の社会参加と孤独・不安、フレイル（心身の虚弱）予防である。ここでは、フレイルの特徴を踏まえて本事業における目的を整理する。

フレイルの具体的な症状には、「外出しなくなった、体重の減少、疲れやすい、歩く速さが遅くなる、認知機能の低下などが挙げられ、一般に①社会的、②身体的、③精神的な三要素に分類される」（図 3）<sup>1</sup>。これらの 3 要素は関連しており、いずれかの要素が欠けると他の要素（機能）も連動して低下するという「負の連鎖」が起きやすいと言われている。そのため、これらの要素すべてに対して低下を予防する取り組みが必要といえる。

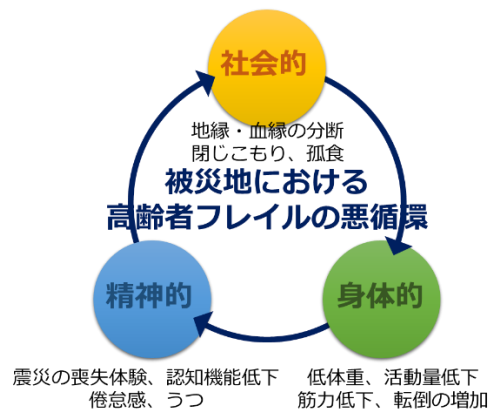


図 3 「被災地における高齢者のフレイルの悪循環」の概念図（2020 年第 9 回東北みらい創りフォーラム発表資料より引用）

本事業の取り組みでは、まずは Step1 として、3 要素のうちの「社会的」機能を保持・増進し、孤独や不安を予防することを目的に、コロナ下における行動制限下においてもオンラインを用いて他者とつながり、コミュニケーションをとるために必要な基本の技術や知識、必要な方には機器の提供（貸出）を行うこととした。

この基本技術を獲得したうえで、Step2 として、身体的活動量の低下や認知機能の低下、抑うつなどの精神的フレイルを予防することを目的に、自宅のできる体操などのオンラインコンテンツの活用やメンタルヘルスの専門家である医師や看護師、カウンセラーとの対話ができるよう支援することとした（図 4）。

<sup>1</sup> 令和 2 年度慶應義塾大学博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型）超成熟社会発展のサイエンス政策提言書「ポストコロナにおけるフレイル予防を目的とした高齢者 向けオンライン生活 支援策に関する提言～東日本大震災の被災地居住高齢者への個別的オンライン支援事業 i-MgNT（愛のマグの手）を例に～」水口高翔・中村拓登（メンター：田中徹、共同提言者：認定 NPO 法人心の架け橋いわて）（2021）より引用

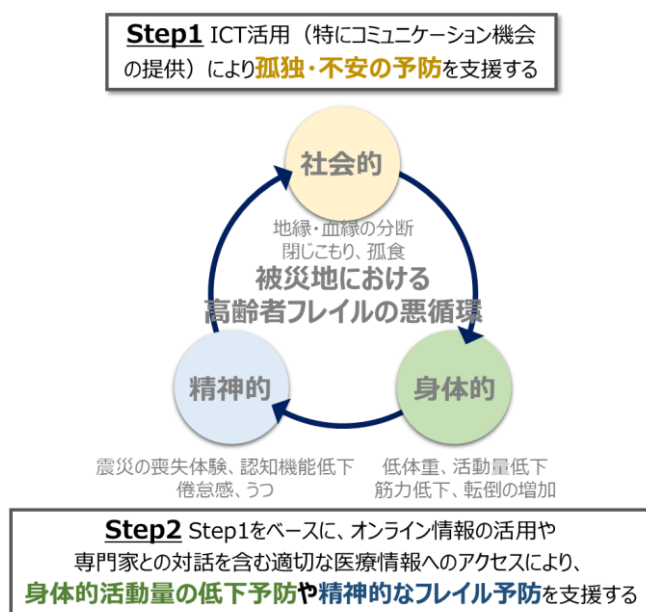


図 4 図 3「被災地における高齢者のフレイルの悪循環」の概念図を踏まえた本事業の目的

### 3. 支援対象者について

学生支援者の親族、及び、当法人のホームページやチラシの配布等を通じて行った募集に応募した32名を対象に支援を行った。このうち、被災地域在住の高齢者、及び、引きこもりの方などで未就労の方を支援する釜石のNPO法人かだっぺし<sup>2</sup>の利用者など28名に対する支援を貴助成金による事業として実施した。（以降、支援対象者の集計にあたっては、特に断りのない限り、今回のプロジェクトで対象とした32名に対する集計結果を掲載している。）

また、32名のうち、グループでの参加が2グループあり（ともに8名のグループ）、その場合、支援対象者は1か所に集まり、そこに各自のパソコンやタブレットを使って学生支援者にオンラインで接続した。

当初、マッチングケースの割合を全体の8割程度とすることを目標としていたが、7割程度に留まった（表1）。その原因としては、大槌町の文化交流センターなど人が集まる場所へのチラシの配布を行ったものの、行動制限下でチラシを目にする人の人数が全体的に減少傾向にあったことや、特に高齢の方を中心に、最初の顔合わせから支援まですべてオンラインで行うというスタイルへの抵抗感などが考えられる。

表 1 支援対象者における親族ケース、マッチングケースの割合

	支援対象者全体	貴助成金による支援対象者
親族ケース	8 (25.0%)	8 (28.6%)
マッチングケース	24 (75.0%)	20 (71.4%)
合計	32 (100.0%)	28 (100.0%)

<sup>2</sup> NPO 法人かだっぺしホームページ： <http://kadappeshi.web.fc2.com/>

## (1) 支援対象者のプロフィール

支援対象者の年代、支援開始時の ICT の活用状況についてはアンケートを用いて確認した。(図 5、表 2、表 5、表 4)。支援開始時点で約 5 人に 1 人 (19%) はタブレットの立ち上げも困難な状態であり、対話に使う zoom や meet などのアプリについては 60 代以上の参加者の半数以上は支援があっても操作ができない状態であった。また、高齢者を中心にオンラインサービスの利用 (行政手続き、ショッピング、宅配など) が難しい状況にあった。特に、オンラインショッピングの利用については、セキュリティに関する不安が障壁になっている様子もうかがわれた。

なお、年代以外の回答については、アンケートへの回答のあった 27 名を対象に集計を行った。

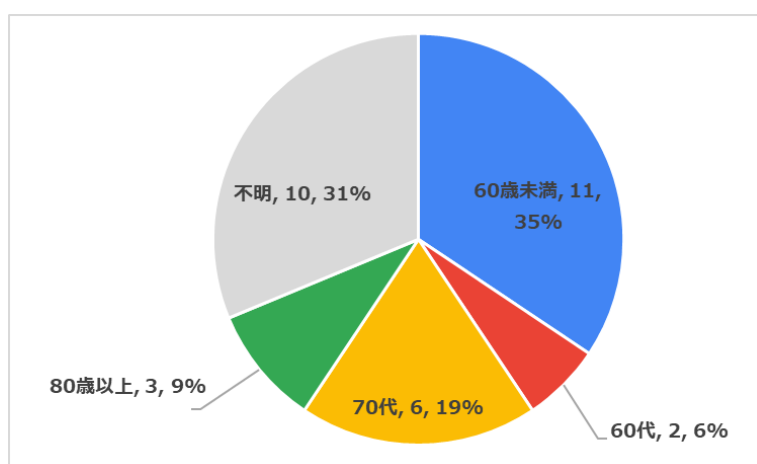


図 5 支援対象者の年齢 (n=32)

表 2 支援対象者の ICT 活用状況 (タブレットの立ち上げ) (n=27)

支援対象者の ICT リテラシーについて [タブレット立ち上げ]	支援対象者の年齢					総計
	60歳未満	60代	70代	80歳以上	不明	
できない	0%	0%	17%	67%	20%	15%
支援は受けられるが自分ではできない	9%	0%	0%	0%	0%	4%
直接対面での手助けがあれば自分で出来る	0%	0%	17%	33%	20%	11%
音声・画面を通じた遠隔支援 (電話等) があれば自分で出来る	27%	50%	0%	0%	0%	15%
手助けが無くても自分で出来る	64%	50%	67%	0%	60%	56%
<b>総計</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>

表 3 支援対象者の ICT 活用状況（オンライン会話アプリの操作）（n=27）

支援対象者のICTリテラシーについて [オンライン会話アプリ（meet等）操作]	支援対象者の年齢					総計
	60歳未満	60代	70代	80歳以上	不明	
できない	0%	0%	33%	67%	60%	26%
支援は受けられるが自分ではできない	9%	50%	33%	0%	20%	19%
直接対面での手助けがあれば自分で出来る	0%	0%	0%	33%	20%	7%
音声・画面を通じた遠隔支援（電話等）があれば自分で出来る	27%	0%	17%	0%	0%	15%
テキストでの遠隔支援（メールやチャット等）があれば自分で出来る	27%	50%	0%	0%	0%	15%
手助けが無くても自分で出来る	36%	0%	17%	0%	0%	19%
<b>総計</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>

表 4 支援対象者の ICT 活用状況（オンラインサービスの利用  
（行政手続き、ショッピング、宅配など））（n=27）

支援対象者のICTリテラシーについて [オンラインサービスの利用（行政手続き、ショッピング、宅配など）]	支援対象者の年齢					総計
	60歳未満	60代	70代	80歳以上	不明	
できない	9%	0%	67%	33%	60%	33%
支援は受けられるが自分ではできない	0%	0%	17%	33%	20%	11%
音声・画面を通じた遠隔支援（電話等）があれば自分で出来る	0%	0%	17%	0%	0%	4%
直接対面での手助けがあれば自分で出来る	27%	0%	0%	33%	0%	15%
手助けが無くても自分で出来る	64%	50%	0%	0%	0%	30%
無回答	0%	50%	0%	0%	20%	7%
<b>総計</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>

また、当初 QOL に関する状況を確認するとしていたが、本事業の目的の一つがフレイル予防であるため、フレイルに関する調査票<sup>3</sup>を用いてフレイルの状況を確認した。全体的な生活の状況についての 3 問についての回答（初回の回答）は図 6～図 8 の通り。

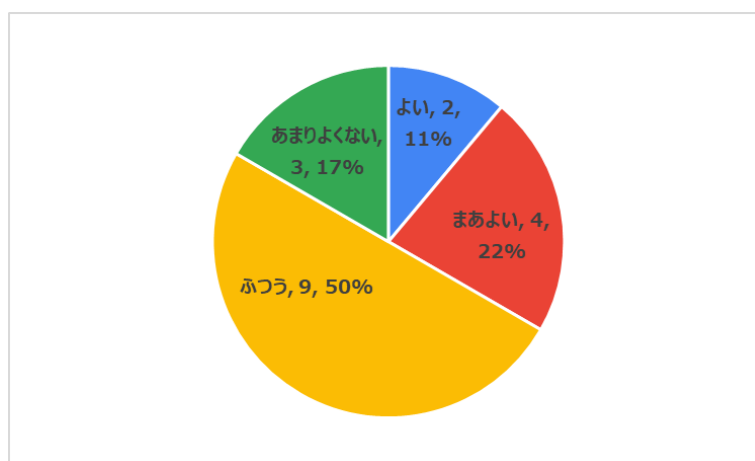


図 6 「あなたの現在の健康状態はいかがですか」への回答（n=18）

<sup>3</sup> 「後期高齢者の質問票」（厚生労働省（2019）『高齢者の特性を踏まえた保健事業ガイドライン第 2 版』による）  
<<https://www.mhlw.go.jp/content/000605505.pdf>（2021 年 10 月 1 日時点）> を用いた。

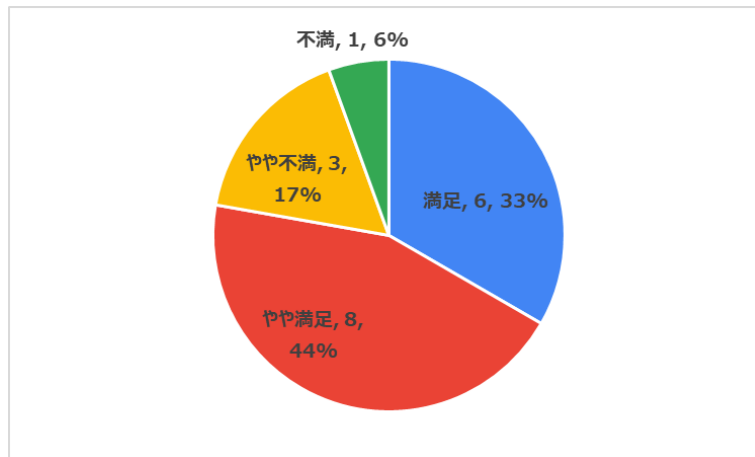


図 7 「毎日の生活に満足していますか」への回答 (n=18)

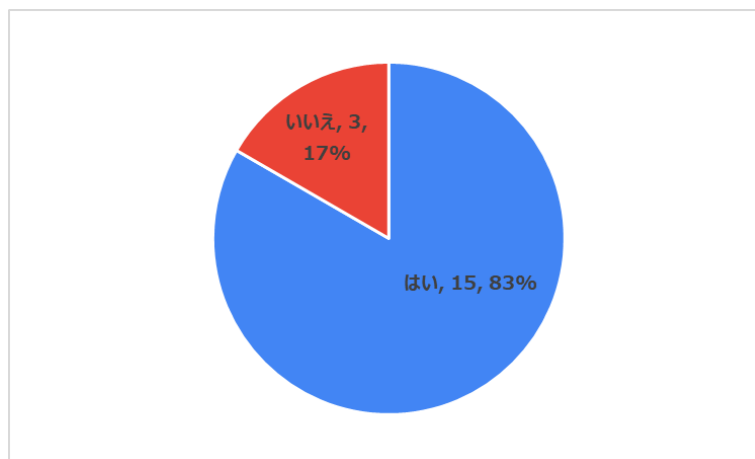


図 8 「ふだんから家族や友人との付き合いがありますか」への回答 (n=18)

## (2) 支援内容・期間

支援には、本プロジェクト専用に学生支援者が設定したタブレットを貸与、または、支援対象者本人が所有するパソコン、タブレットを用いた。自宅にインターネット環境がない場合には、モバイルルーターやSIMカード内蔵のタブレットを貸与（通信費用は本プロジェクト負担）した。

支援内容はオンラインでの会話（zoom や meet の使い方）を基本としつつも、支援対象のスキルや希望に応じたオーダーメイドでの支援とした（表 5）。また、ご希望があったり、日程が合ったりした場合には看護師による健康相談を受けることもあった。また、健康情報提供のトライアルとして、「新型コロナウイルス感染拡大下における不安にどのように対処するか」というテーマでの動画配信も行った（支援の様子は、図 9）。



表 5 支援内容の例

- ・ オンラインでの会話（zoom や meet など）
  - ・ パソコンの基本的な使い方
  - ・ Facebook などの SNS の使い方
  - ・ ホームページを作る
  - ・ スマホの使い方
  - ・ 地元の支援機関との相談をオンラインで行う
  - ・ 孫とオンラインで会話をする
- など



図 9 実際の支援の様子

上：支援の様子、左下：支援中の画面の様子、右下：当法人メンバーの看護師による健康相談の様子

支援期間は人によって異なるが、2021年9月末時点で、3か月～14か月であった（表6）。支援終了の理由としては、親族ケースにおいて、学生支援者が卒業により支援ができなくなったことや、グループケースにおいて新型コロナウイルス感染拡大を受けインターネット接続のある施設への集合が難しくなったこと、目標としていたスキルを習得したことなどが挙げられた。

表 6 支援期間

継続/終了	期間（月数）	支援対象者人数
継続中	1年以上	3（9.4%）
	半年～1年未満	13（40.6%）
	半年未満	5（15.6%）
終了	半年～1年未満	3（9.4%）
	半年未満	8（25.0%）
総計		32（100.0%）

支援にあたっては、支援を重ねるごとに上がってくるトラブルや質問、トラブルへの対応を支援者間で共有し、それらのナレッジを随時貸与タブレットの設定に反映していった。また、それに対応して支援対象者向けのマニュアルの改善を行った。

その結果、事業期間終了時点では、高齢者や、パソコン・タブレット初心者であっても非常に簡単に支援者につながる仕組みと高齢者のつまづきやすいポイントを踏まえたマニュアルを作成することができた（図 10、表 7）。マニュアルについては付録資料として添付した。



図 10 使用したタブレット

左上：タブレット外観、右上：タブレットの電源を入れた画面。必要なアイコンのみ見えるようにして高齢者が迷わない画面設定に配慮、また、電源ボタンの位置にはシールを添付した。左下：電源コンセントなどにシールを添付し差込口に迷わないように配慮した図、右下：難聴の高齢者向けに用意したヘッドセット。

**表 7 タブレットの設定における工夫の例**

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 起動時のパスワード省略設定（外部リンク）</li> <li>・ シャットダウン用のショートカットを作成（外部リンク）</li> <li>・ 文字サイズの調整：文字サイズを 125%にする</li> <li>・ 音量の調整：パソコンの音量を 100%にする</li> <li>・ タッチ操作感度の調整             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 長押しで右クリックが出ないようにする：「長押しを右クリックとして認識する」のチェックを外す</li> <li>- ダブルタップ速度調整：スピードを遅いに変更</li> </ul> </li> <li>・ ピン留めの解除：不要なアイコンのピン留めを解除し、よく使うドキュメントフォルダのみ残す。</li> <li>・ デスクトップアイコンの削除：支援に使うアイコン（基本は zoom）のみ残してあとは削除する。</li> </ul>	など
---	----

#### 4. 成果と課題

##### (1) アンケート・インタビュー結果

ICTリテラシーに関する調査では、支援に関する満足度も確認した。満足度に関する回答の記入のあった方で、複数回答があった場合には最後の回答を対象に集計を行った。その結果、87%の方が、ポジティブな評価を行っており、満足度の高い支援を実施することができた。

**表 8 サポートを受けた満足度 (n=16)**

満足度低い←

→満足度高

サポートを受けた満足度	1	2	3	4	5	7	8	9	10	総計
人数	0	0	0	0	2	5	4	0	5	16
%	0%	0%	0%	0%	13%	31%	25%	0%	31%	100%

支援についての満足度についてインタビューでも確認したところ、表 9、表 10 のような回答が得られた。また、同じ対象者にどのようなことができるようになったか尋ねたところのような回答が得られた。

**表 9 支援に関する参加者からの声（満足度）**

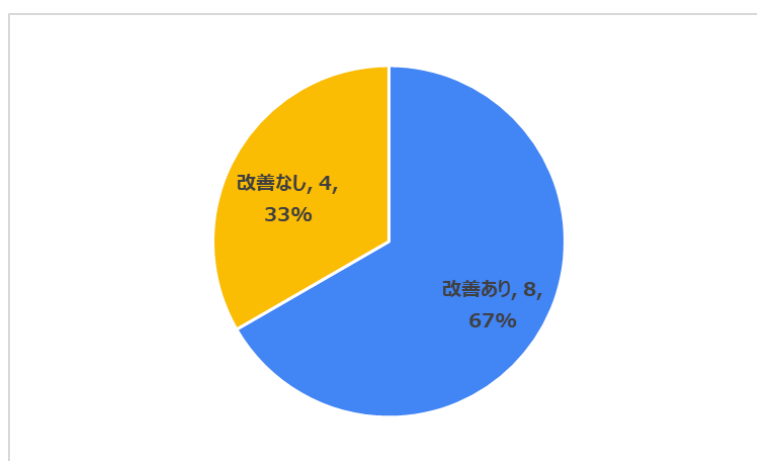
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クリックする場所に印をつけてくれるなどわかりやすくてよかった。対応が親切で、説明が具体的でわかりやすい。</li> <li>・ 丁寧に教えて頂いてよかった。</li> <li>・ 資料が大きな文字で高齢者にもわかりやすかった。安心して教えてもらうことができる。自分のパソコンでもやってみたい。メールやタブレットの利用などにこれから挑戦したい。</li> </ul>
---

- ・ あっという間に時間が過ぎて、普段聞けないことが聞いて良かった。学生さんに（オンライン上で）会うことで生きがいができている。画面を見ながら打ち込んだりできるので非常にわかりやすい。  
など

**表 10 支援に関する参加者からの声（できるようになったこと）**

- ・ アメリカのお友達などにつながることで良かった。
  - ・ zoom でのやり取りができるようになった。コロナでなんでも zoom になっているので助かっている。
  - ・ 孫と自分でやり取りができるようになった。
  - ・ 「海外の友人の Facebook 投稿に『 いいね 』しかできなかったが、翻訳機能を使ってチャットができるようになった。」
- など

ICT スキルの改善状況については、ICT リテラシーに関する調査に対して、2 回以上の回答のあった 12 名について状況を確認した。全体として、全体の約 7 割の方に何らかの改善が見られた（例えば、タブレットの立ち上げができなかったのができるようになった、オンライン会話アプリの操作が一人でできるようになった、など）（図 11）。一方、一定数の参加者については、認知機能の低下などにより ICT の活用は一進一退し、改善してはまだ戻り、という状況を繰り返す方もあった。ただ、今回用意したタブレットを利用することで、ICT 活用の技術レベルによらず、仮に高齢者本人が電源を入れるまでしかできない場合でもすべての参加者とオンラインでつながることはできた。



**図 11 ICT リテラシーに関するアンケートで改善が見られた割合（n=12）**

フレイルについては、支援の経過による変化を確認する予定であったが、名前の記入があるなどして変化の確認ができる状態の回答が少なかったため、集計が困難であった。加えて、変化が確認できる状態にある回答についても大きな変化はなかった。

また、今回、支援者として事業に参加した学生からは本プロジェクト参加により、「高齢者に対する理解が深まった」「支援者として親族に接することで看護を学ぶものとして成長したように感じる」といった前向きなコメントが寄せられた。

## (2) NPO 法人かだっぺしにおける事例

### 支援の概要：

同法人は釜石市にある引きこもりがちの方などに対する就労支援などを行っている法人である。今回、メンバーさんにオンラインの活用が難しい方が多く、コロナ下の行動制限により、体調に不安を感じたときに相談する手段がなくなることを懸念した代表の鈴木さんからの依頼で支援を開始した。

2021年3月より月に2回の頻度で毎回8名程度が参加している。当初はオンラインで他者とながらることを目的にzoomの使い方支援を行っていたが、2021年9月末現在は、ものづくり活動紹介用のポスター制作に取り組んでいる。

### 同法人における成果（代表の鈴木さんへのインタビューから）：

代表の鈴木さんに対するインタビューでは以下のような成果が挙げられた。

- パソコンが得意な人が苦手な人を教えるという、「メンバーさん同士の教え合い」という新しいコミュニケーションが生まれた。
- 何かあればこころがけ（認定NPO法人心の架け橋いわての愛称）の専門家にオンラインで相談できるという強い安心感を持つことができた。
- 特にパソコンが得意な人については、支援者として、高齢者のパソコン利用をサポートする機会（SIMカードの交換やzoom接続支援）を得ることができた。コロナ下でイベント伴うアメニティの制作受注などが減る中で、こういった機会はメンバーさんの励みや自信になった。

## (3) 成果のまとめと課題

本事業における成果には大きく以下の3点が挙げられる。

### ① デジタルディバイド対策における具体的改善事項の確認による高い支援満足度

高齢者やパソコンやタブレットの操作に不慣れな方でも簡単にオンライン会話アプリにつながる仕組みが構築できた。このことにより、高齢世代のパソコンやインターネットへの拒否感が軽減し、当初はIT機器の利用に後ろ向きだった高齢者であっても継続的に支援に参加することができたと考えられる。また、支援に対する高い満足度につながった。

これにより、本事業の目的とした、ICTの活用により社会的フレイルを予防する取り組みについては十分な成果があげられたと考えている。

### ② 孫世代側の高齢者理解深化、看護学生等の次世代担い手の動機付け強化

本事業は高齢者側だけでなく、学生支援者にとっても学習・成長の良い機会となった。ソフトウ

エリアを専門とする学生にとっては高齢者特有のつまづきポイントや、高齢者専用のスマートフォンなどの設定について学ぶ機会にもなり、看護学生にとっては定期的に高齢者とオンラインで対面し健康に関する相談を受けることなどを通じて、高齢者の健康に関する知識や関心が高まった様子が窺われた。

### ③ 多様な高齢者の ICT 活用支援へと広がりを見せたこと

本事業の実施が、盛岡市でのワクチン接種予約サポートや大槌町での高齢者向けスマホサロンの実施など多様な支援へとつながった。また、NPO 法人かたっぺしの事例からは、本取組が就労支援へとつながる可能性も示唆された。

一方で課題も明らかになった。大きく以下の 7 点が挙げられる。

#### ① 高齢者の個別性、多様性に合わせたオーダーメイド的対応

高齢者の ICT 活用には個別性、多様性が高いため、高齢者の希望にあった支援を行い、高齢者のモチベーションを維持させるためには ICT に関する幅広い技術・知識やコミュニケーション能力が求められる。これらを備えるための支援者の教育が必要である。

#### ② 孫世代（学生支援者）の参加者動員

本支援の実施にあたっては学生支援者の確保が必須であるが、学生は学業が本業であるため時間的な制約も大きく、日程調整が難しくなるケースが散見された。今後事業を拡大するにあたっては、学生に対して本事業の社会的意義や成果などを PR して、十分な支援者の確保が必要である。

#### ③ 行政や地域医療との連携・連動

高齢者の ICT 利用については、医療サービスの利用や、防災情報の取得など、今後想定されるあらゆるサービスの利用にとって重要なポイントと言える。そのため、同じ課題を持つ医療機関や行政などと連携し、高齢者の ICT 活用を進めることで、高齢者・支援者・行政にとってより利益のある事業となると考えられる。まずは当法人が活動拠点としている岩手県大槌町・釜石市周辺の医療機関や町役場などと連携し、ともに高齢者の ICT 利用を推進する取り組みが必要である。

#### ④ 通信インフラ

本支援実施にあたっては、安定した通信インフラ（ネットワーク環境）が必須である。機器やお住まいの地域、利用する時間帯により通信状況が乱れ、支援が思うように進まないケースが多々あり、高齢者側のモチベーションの低下につながることもあった。本事業の継続・拡大にあたっては、通信会社との連携も含め安定したネットワーク環境の準備が必要である。

#### ⑤ 重度認知症事例へのサービス提供

認知機能の低下が見られる支援対象者にあつては、新しい技術の獲得支援は非常に困難であ

ることがわかった。ただし、軽度の事例であれば、支援により当初、側に人がいなければ機器の操作ができなかった方が、遠隔地からの支援でも操作できるようになるなど、改善が見られたケースは存在したことから、認知機能の低下の程度に応じたゴール設定や機器の設定など、きめ細やかなケース運用が必要だと考えられる。

また、このことは認知機能以外の聴覚や視力の問題も同様で、聴力の問題についてはヘッドセットを準備し、視力の問題については画面に表示される文字やアイコンのサイズを大きくすることで高齢者のストレスが軽減していたことから、困難さの程度にはよるものの、高齢者の特徴にあった支援を行うことで、ICT 技術獲得へのモチベーションの維持や獲得そのものの支援が可能ではないかと考えられる。

### ⑥ 健康啓発教育への展開

今回、学生支援者による ICT 活用支援を行う中で、健康啓発教育を行うことを考えていたが、タブレットの起動や会話アプリの利用など機器の操作支援にとどまり、その先の健康情報取得の支援まで行えたケースは非常に少なかった。高齢者のニーズを踏まえた、健康情報の提供（提供方法に関するノウハウの蓄積および提供するコンテンツの開発）が今後必要である。

以上を踏まえると、事業の目的として挙げた、Step1 については十分な成果が挙げられたと考えられるが、Step2 の取り組みについてはまだ十分とは言えず、上に課題のなかで挙げた、支援者の教育や他機関との連携、認知機能低下への対応、健康教育啓発のためのコンテンツ開発が必要であり、本事業の次の展開として取り組んでいきたい（図 12）。

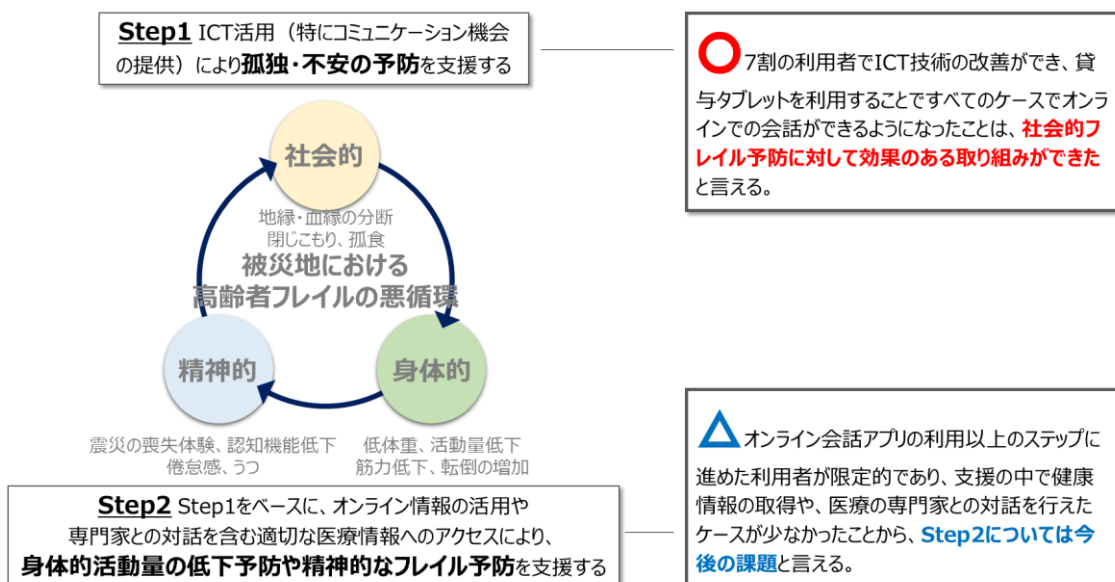


図 12 事業目的の達成状況

## 5. 今後の展望

今回の事業の成果と課題を踏まえ、今後の展望として以下を行うべく準備を進めている。

### (1) 事業の拡大

今回、32 名の高齢者を対象に血縁者、非血縁者の学生支援者による支援事業を実施したが、高齢者の ICT 活用における多様性の高さを踏まえ、さらに多くの高齢者を対象に事業を実施することで、より高齢者の多様性に配慮したサービスの在り方を検討し、更には地域全体の孤独・不安対策に生かすことを目指す。

具体的には、支援対象者を 60 名に増やし、ICT 活用度や認知機能の状況などを踏まえたサービスの在り方を検討したい。同時に、当法人が被災地にて実施しているサロン活動に本仕組みを取り入れた、オンラインサロン（オンラインでの健康相談や ICT 活用支援）を実施したり、事例として紹介した釜石市の NPO 法人かだっぺしとの連携により、高齢者支援に取り組む他団体の支援を行ったりするなど、支援対象者を拡大したい。これらの活動を通じて、更に高齢者のオンライン活用支援に関するノウハウを蓄積し、自治体や高齢者支援団体などからの委託事業に発展させることが当面の目標である。

### (2) 動画を使った健康情報の提供

課題⑥に挙げた健康啓発教育の導入にあたっては、どのような方法が支援対象者のニーズに合っているのかを確認するため、プロジェクト参加者に対してアンケート調査を行った。

まず、健康や医療に関する情報を調べる場合に何をを用いているか確認したところ、全体としてはテレビの情報が主であるものの、一定数インターネットを活用している様子がうかがわれた（表 11）。また、取得する情報としては、病気の予防や健康増進、病気の治療法への関心が高い（表 12）。さらに、プロジェクトで健康に関する情報提供をしたらどのような方法がよいか尋ねたところ、動画配信による方法が最も望まれていた（表 13）。テレビの代替としての役割を期待されていることがうかがわれる。

これを受けて、本プロジェクトでは、高齢者にも親しみやすく、視覚的にも理解しやすい健康啓発動画の制作を行うこととした。現在制作中であり、完成後は本プロジェクトの参加者のみならず、岩手県大槌町の施設を中心に動画を放映することを予定し、準備を進めている。すでに一部撮影を終え、2021 年 10 月中にはフレイル予防の啓発動画 3 本が完成する予定である。



**表 11 質問「健康や医療に関する情報を調べる場合、どのような方法を使っていますか。」に対する回答（複数回答）**

	60歳未満 (n=9)	60代 (n=3)	70代 (n=3)	80代以上 (n=3)	総計 (n=18)
テレビ	67%	33%	67%	100%	67%
インターネット	89%	33%	33%	67%	61%
新聞・雑誌	11%	33%	67%	67%	33%
主治医	33%	33%	67%	0%	33%
知人・友人	44%	33%	67%	33%	44%
その他	11%	33%	0%	0%	11%

**表 12 質問「インターネットでは、どのような情報を取得しましたか。」に対する回答（インターネットを使って健康や医療に関する情報を調べたことのある方に対してのみ、複数回答）**

	60歳未満 (n=8)	60代 (n=1)	70代 (n=1)	80代以上 (n=2)	総計 (n=12)
病気の予防、健康増進方法	63%	0%	0%	100%	58%
病気やその治療法に関する情報検索	38%	0%	100%	100%	50%
病院検索	38%	0%	0%	0%	25%
その他	13%	0%	100%	0%	17%

**表 13 質問「このプロジェクトでは、動画やテレビ電話を使って病気の予防や健康増進方法に関する情報提供を行うことを考えています。どのような内容であれば使ってみたいと思いますか。」への回答（複数回答）**

	60歳未満 (n=9)	60代 (n=3)	70代 (n=3)	80代以上 (n=3)	総計 (n=18)
健康に関する動画配信（あらかじめ撮影された健康に関する番組をインターネットで見る）	56%	67%	67%	100%	67%
健康に関するオンライン・サロン（zoomなどを使って会話しながら進めるサロンに参加する）	33%	0%	33%	0%	22%
健康に関する情報の調べ方・インターネットの使い方講座（検索の使い方、信頼のおけるホームページの調べ方などを現在実施中の支援の中で取り上げる）	33%	33%	67%	0%	33%
健康に関するテレビ電話を使った個別相談（zoomなどを使って、医師や看護師やカウンセラーなどに個別に相談する）	33%	67%	0%	0%	28%